

## 生命科学研究独立アプレンティスプログラム (実施期間：平成 20～24 年度)

実施機関：大阪大学（総括責任者：平野 俊夫）

### プロジェクトの概要

生命科学関連部局が横断的に協力し、特任准教授として若手研究者の独立を支援する。独自の研究テーマを展開するために、外国から帰朝し独立を希望する研究者を優先して採用する。研究の独立性を完全に担保するものであるが、孤立することがないように、親講座を選任し、完全独立のための「アプレンティス（見習い）」として、必要なノウハウを教授する。適度なプレッシャーを与えながらも、安心して大きな成果をめざす環境を提供する。若手研究者と親講座及び両者から独立した支援運営委員会からなるコンソーシアムにより運営する。また、このコンソーシアムを発展させ、次世代の生命科学研究を担う地域の中核たる組織構築もめざしていく。

### (1) 評価結果

総合評価	目標達成度	国際公募・選考・業績評価	人材養成システム改革 (制度設計に基づく実施内容・実績)	人材養成システム改革 (制度設計に対するマネジメント)	実施期間終了後における取組	中間評価の反映
A	a	a	a	a	s	a

総合評価：A（所期の計画と同等の取組が行われている）

### (2) 評価コメント

多様な研究者を6つの生命科学関連部局が共同で採用しつつ、独立性を担保し、重層的な支援によりテニユアトラック若手研究者（以下、「TT 若手」という）を育成し、目標を上回るテニユア教員を育成・採用するなど、分野横断・部局複合型のテニユアトラック制（以下、「TT 制」という）の制度設計を試み、また、平成 18 年度採択のプロジェクトとも連携して、全学的な TT 制の支援システムにつなげたことは評価できる。今後は、人文社会系をも含めた全学的な TT 制の普及・定着が進むことを期待する。

- ・ **目標達成度**：海外で研究中の若手研究者の受け入れの積極的な推進や異なる部局に対しても統一基準で採用や評価をすること、また、自立性を高め研究費の公平配分を実施するなどの特長あるシステムを確立している。当初のテニユアポスト準備率が低いとの指摘に対しても、その後の努力により十分なテニユアポストを確保し、テニユア採用も予定以上となっていることは評価できる。
- ・ **国際公募・選考・業績評価**：公募・選考・業績評価については、参加部局の特性を生かしつつ、各部局の意向のみで決まることのないように選考、評価の仕組みが工夫され、全体として公正で、透明性の高いものとなっていることは評価できる。また、テニユア審査も外部委員、他部局の評価も加えた3段階の審査による多面的な審査であり、プロジェクトを通じて、公正で効果的な審査が行われている。
- ・ **制度設計に基づく実施内容・実績**：育成に当たっては関連親講座を決めつつも、自立性に十

分な配慮がなされ、正・副のメンターを配置し、事務支援についても十分に配慮された育成支援体制としたことは評価できる。また、本プロジェクトは6部局にまたがった取組であるが、各部局の意向のみが反映することのないように制度設計を行い運営するなどの工夫が見られる。本プロジェクトの実施が、全学支援組織の立ち上げや全学からの経費と事務支援による若手人材の養成の取組みにつながっており、今後の更なる展開を期待する。

- **制度設計に対するマネジメント**：平成18年度に先行して採択された工学研究科のTT制と本プロジェクトを運営する中から、問題点を整理し、機関としての人材養成改革構想の最適化を目指し、「若手研究者育成ステーション」を大学の本部に設置することにより、両プログラムとステーションとが三者一体となってPDCAサイクルを活用する仕組みが確立されたことは評価できる。今後は、この仕組みが全学的に広がることを期待する。
- **実施期間終了後における取組**：本プロジェクトに参加した薬学研究科では、実施期間終了後もTT制による採用を進めることとしており、計画的にTT若手を採用する体制を整えたことは高く評価できる。また、全学機構の「若手研究者育成ステーション」が中心となって、全学の規程などの調整を進め、学長裁量による研究費支援なども準備されており、人文社会系を含む他の部局へのTT制の普及を期待する。
- **中間評価の反映**：外国籍研究者の応募を増やすための国際公募の工夫に関しては、中間評価後にTT若手の採用がなく、反映が不明確であったが、それ以外に関しては、十分な改善がなされており評価できる。今後は、機関全体の新規採用教員の約20%をTT制によって採用する計画についても着実に実施することを期待する。